

Strix 6 : 1-13(1987)

## 北海道十勝地方のタンチョウの生息状況<sup>1</sup>

日本野鳥の会十勝支部<sup>2</sup>

### 緒言

タンチョウは十勝地方にも少数ながら生息し繁殖もしている。しかし、その生息状況については、飯嶋・山田(1983)、北海道教育庁(1975,1981)、正富ら(1982,1983)、MASATOMI et al. (1985)、北海道(1986)が簡単に触れているだけである。

今回、十勝地方全体のタンチョウの生息状況を明らかにする目的で資料の整理を行ったので報告する。

### 調査期間および調査方法

十勝地方におけるタンチョウの主な生息地は、大樹町と豊頃町である。大樹町については飯嶋・山田(1983)を参考にし、1969-85年の、豊頃町やその他の地区については1976-85年の資料をまとめ、これに検討を加えた。繁殖状況については、飯嶋・山田(1983)とかなり重複する。

調査は随時行い、観察には8-10倍双眼鏡および25-50倍の望遠鏡を用いた。記録提供者は次のとおりである。

飯嶋良朗、土田光子、伊藤篤二、村上寿之、徳永晃、志村国昭、川辺百樹・山田政一、百瀬邦和、中村悟、高倉功、村上明生、加藤徹、若杉節、髪右近、早丸寛、芳賀良一、藤巻裕蔵、青木則幸、宮嶋浩路、横山渡、平沼裕、須田修、建部邦彦、小野登士和、恵原琢躬、正富宏之、Mr. & Mrs. ARCHIBALD、山田勇一、海富武彦、中村正幸、松尾武芳、大笹清、杉本剛、浅水慎一、前田崇雄。

このほか、十勝支部機関誌「十勝野鳥だより」、帯広畜産大学自然探査会機関誌「どんかち」の記録、毎年12月5日を中心に行われるタンチョウ一斉調査の結果も資料として用いた。一斉調査の結果は大樹、豊頃、浦幌、池田の各町の教育委員会および十勝支庁から御提供いただいた。

なお、本報告の成鳥、幼鳥、亜成鳥は、それぞれ、完全に成鳥羽のもの、その年にふ化したいわゆる当才雛、前2者以外で完全に成鳥羽になっていないものをさす。

---

1986年11月20日受理

1. 執筆者：飯嶋良朗、〒089-21北海道広尾郡大樹町下大樹 大樹町農業共済組合
2. 〒080帯広市稲田町、帯広畜産大学野生動物管理学研究室

## 結果と考察

## 1. 生息状況

## 1) 生息場所

主な生息場所は大樹町と豊頃町である (Fig 1).

大樹町：繁殖地であるキモントウ沼, 生花苗沼 (オイカナマイヌマ), 当縁 (トウベリ) 川河口一帯の湿原 (以下トウベリ湿原) およびその周辺で観察されるほか, 非繁殖期には相川 (旧興農), 住吉 (旧昭徳), 寿, 中島, 歴舟 (旧更生), 茅武で観察記録がある。相川, 住吉のような日高山脈山麓部での記録は稀で, これまでにそれぞれ1例あるのみである。繁殖期間中に繁殖地周辺以外に飛来した例は少なく, 1983年6月15日, 3羽が中島 (旧瑞穂) で観察された1例があるのみである。

豊頃町：沿岸部に湧洞沼, 長節湖の2湖沼があり, 十勝川を境に浦幌と接している。豊頃市街および茂岩の市街地は十勝川河口から約18 kmの位置にあり, その上流約2 kmの川畔に育素多沼がある。育素多沼から河口までの左岸沿いには, 三カ月湖や小沼が散在する。河口南岸に大津市街があり, 河口一帯に湿原が展開する。以後, 豊頃町大津を中心に河口南岸 (右岸) に展開する湿原を大津湿原, 河口北岸 (左岸) から浦幌十勝川の河口の間に展開する湿原をトイトッキ湿原と呼ぶことにする。

豊頃町では, 繁殖地である湧洞沼, 大津湿原, 長節湖を中心に観察されるほか, 十勝川流域 (河口から育素多沼まで) に観察記録が集中している。このほか, 牛首別川支流久保川流域の二宮で少しの記録がある (1982年11月7日2羽, 1983年6月28日2羽)。繁殖地以外でのまとまった観察記録は1981年からのものしかないが, それによると, 繁殖の観認さ

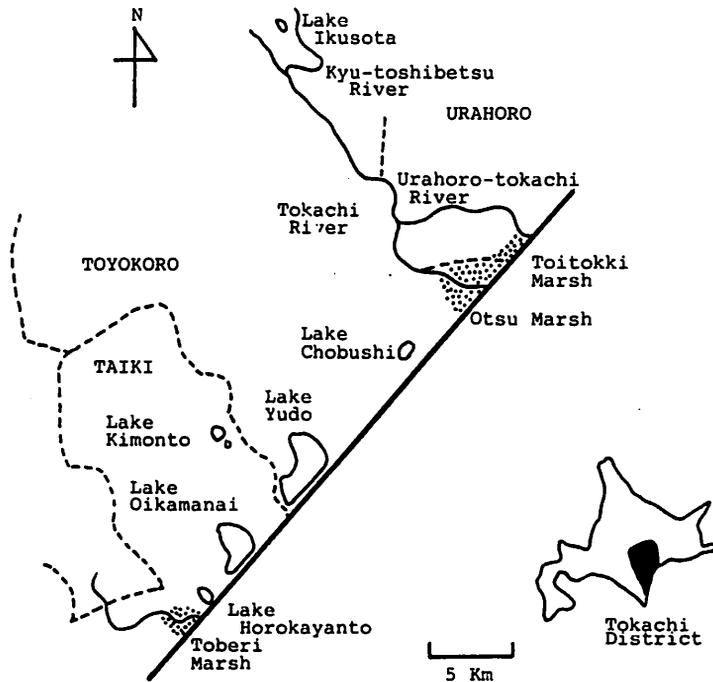


Fig. 1. Map of the study area.

Table 1. Sight records of the Japanese Crane at the Urahoro region in the Tokachi District, Hokkaido.

Date of Observation	Place	Numbers (Nos. of Group)	
1956 Dec. 4	Toyokita	A 1 [dead body]	
1971 Oct. 16	—	—	
Nov.-	Aiushi	J 1 [dead body]	
1983 Nov. 30	Aiushi	A 2	(1)
1984 Oct. 7	Yoshino	1	(1)
	Toitokki Marsh	1	(1)
Dec. 1	Toyokita	2, 1	(2)
1985 Jul. 9	Tokachibuto	A 2	(1)
Oct. 10	Toyokita	A 2SA (or J) 1, (2)	
	↓ Toitokki Marsh	A 2	
Nov.10	Toyokita	A 5	(—)

A : Adult    SA : Sub adult    J : Juvenile    — : Unknown

れていない場所でも、繁殖期間を通して、成鳥や亜成鳥が観察されている (Table 4)。

浦幌町：主に十勝川河口で観察されている。現在のところ、トイキトッキ湿原は大津湿原あるいは長節湖で繁殖する番の行動範囲と考えてよいであろう。これまでの浦幌町における観察例は、主に、非繁殖期のもので、吉野より内陸部では、タンチョウの生息に適した環境がないため、観察記録はない。浦幌町における記録を Table 1 に示した。ただし、毎年12月に行われる一斉調査の記録は除いてある。

その他：1977年9-10月、1羽が中川郡池田町川合のゴミ捨場に飛来した (1977年10月21日付十勝毎日新聞)。ここは十勝川流域であり、豊頃町に生息していたものが川沿いに移動したものと思われる。このほか、池田町には、一斉調査時の記録が1例ある (Table 5)。

1978年2月17日、広尾郡広尾町札楽古 (楽古川河口より約10 kmの地点、すでに日高山脈に入る) に亜成鳥2羽が飛来した。これらは楽古川河口に移動し、3月上旬まで滞在した。十勝地方におけるタンチョウの2月の観察例は非常にめずらしく、我々の知る限りでは、このほか、大樹町での1例 (後述) があるのみである。

1981年4月、足寄郡陸別町苫務のデントコーン畑に1羽が飛来した (1981年5月3日付北海道新聞)。これは繁殖しない個体であろう。

1983年6月16日、河東郡上士幌町に亜成鳥と思われる3羽が飛来し、市街周辺や東居辺の畑で18日まで観察された (川辺1985)。これらは繁殖しない個体であろう。

## 2) 生息期間

十勝地方全体では、1年を通してすべての月に観察記録がある。しかし、冬期の記録は極めて少ない。冬期は釧路地方に移動するものと考えられる (飯鳴・山田1983)。

大樹町：記録が多いのは4月上旬-11月下旬である。生花・晩成地区の住民によれば、タンチョウは毎年3月下旬には見られており、また、12月下旬まで、少しの観察記録がある。1月-3月上旬の記録としては、1980年1月5日 (中島3羽)、1月11日 (美成、1羽、ただし1月上旬に1-3羽の観察があった)、1984年1月 (美成、1羽) におけるものがある。

このほか、1974年1月7日、凍結したキモントウ沼の雪上に新しい足跡が認められた記録がある。また、数年前から（確実な記録では1980年から）、10月下旬になると茅武に1-2羽が飛来し、翌年1月中旬まで滞在するようになった。これらは成鳥の場合もあれば、非成鳥の場合もあった。茅武には、冬期凍結しない湧水があり、そこを中心に生活していた。しかし、1985年から86年にかけての冬期間には、同地区への飛来はなかった。

1985年2月28日、成鳥2羽が生花苗沼で観察された。また、1978年3月9日、市街部の寿に2羽が飛来した。厳冬期には我々の調査回数も少ないので、この時期にタンチョウの飛来はあっても、観察されていないのかも知れない。冬期、生花苗沼ではワカサギ釣りが行われるが、釣り人によるタンチョウの観察もないわけではない。しかし、これらの記録は確認するに至っていない。上述のように、タンチョウは3月下旬-4月上旬に渡来し、12月下旬にはほとんどが渡去するのが普通である。冬期、タンチョウが生息しないのは、凍結しない水場が極めて少しいという理由によるものと考えられる。最も遅い記録は12月23日（1979年）であった。

豊頃町：豊頃町における生息期間も、大樹町とほぼ同じである。最も早い記録は3月28日（1982年2羽旧利別川流域）であり、最も遅いのは12月24日（1983年2羽旧利別川流域）であった。冬期間の記録はほとんどないが、これは調査回数が少ないためと思われる。

## 2. 繁殖

これまでに、十勝地方で繁殖が確認されたのは、大樹町で4か所、豊頃町で3か所の計7か所である。大樹町の繁殖状況については、飯嶋・山田（1983）が1971-1982年の記録を、十勝全体については北海道（1986）が1971-1985年の記録を報告しているが、これらは資料の読み違いや検討の甘さなどから内容に誤りも認められ、また、今回追加された記録もあるので、今後の混乱を避けるため、地区毎に繁殖状況を詳述する（table 2）。

### 1) 大樹町

キモントウ沼、生花苗沼、ホロカヤントウ沼、トウベリ湿原の4か所で繁殖が確認されている。

キモントウ沼：大沼とその東南部の小沼とからなっており、大沼の北側と小沼の周辺で、ほぼ毎年1番ずつが繁殖している。両番のなわばりの境界は大沼と小沼の間にあるようである。繁殖の初確認は1973年であった。4月29日、小沼で抱卵中の成鳥が認められた。12月2日には大沼で成鳥2羽・幼鳥1羽、それとは別に行動する成鳥2羽が見られた。大沼で見られたこれら家族の由来は不明である。この年、1番の繁殖は確実であり、もう1番繁殖した可能性もあるように思われる。1974年8月8日、幼鳥1羽を伴った番が2組観察された。1975年は繁殖の確認をしていないが、繁殖期間を通して成鳥が見られており、この前後の年に2番が繁殖していることから考えて、1-2番繁殖した可能性はある。1976年7月2日、大沼で成鳥2羽・幼鳥2羽、小沼で成鳥2羽・幼鳥1羽、また大沼で幼鳥を伴った家族とは別に行動する垂成鳥1羽が観察された。1977年は大沼で1番、小沼で2番の営巣が認められたが（正富ら1982）、幼鳥の確認に至っていない。1978年4月21日、大沼の南側で抱卵中の成鳥が観察された。これは営巣場所から推定して、これまで小沼で繁殖した番と思われた。後日、この巣は放棄され、大沼と小沼の間に新しい巣が作られた。大沼では繁殖を確認していないが、大沼北側で繁殖期間を通して成鳥が観察されているので、繁

Table 2. Confirmed numbers of breeding pairs of the Japanese Crane in the Tokachi District, Hokkaido.

	Taiki			Toyokoro			
	Lake Kimonto	Lake Oikamanai	Lake Horokayanto	Toberi Marsh	Lake Yudo	Lake Chobushi	Otsu Marsh
1971				1	1		
1972							
1973	1			1			1
1974	2			1			1
1975							
1976	2			1			
1977	3			1			1
1978	1	1		1			
1979	2	1		1	1		1
1980	2	1	1	1	1		1
1981	1				1 (or 2?)		
1982	2			1	2		1
1983	2			1	1		1
1984	1	1		1		1	
1985	1	1		1	1		1

殖した可能性はあると思われる。1979年は2番の営巣が確認され、7月11日には成鳥2羽・幼鳥1羽の家族が観察されたが、どちらで繁殖したものか不明である。1980年も2番が繁殖した。6月9日にはそれぞれの番に2羽の幼鳥が認められたが、8月には幼鳥は1羽ずつとなっていた。1981年7月20日、大沼で成鳥2羽・幼鳥1羽、小沼で成鳥2羽が見られた。6月27日には成鳥1羽・幼鳥1羽が、9月15日には成鳥2羽・幼鳥1羽が観察されているが、いずれもどちらの番かは不明である。この年、大沼で1番が繁殖、小沼でも繁殖があったものと思われる。1982年も2番の繁殖が確認された(正富ら1982)。10月17日には成鳥2羽・幼鳥1羽が見られたが、この家族の由来は不明である。1983年も2番の繁殖が確認された(正富ら1983)。7月31日には大沼で成鳥2羽・幼鳥1羽が見られており、また、6月19日にも同構成の1群が観察されているが、これはどちらの番かは不明である。1984年7月29日、大沼で成鳥2羽・幼鳥1羽が観察された。小沼では繁殖期間を通して成鳥1羽が観察されており、また、空中からの調査でも1巣しか観察されていないので(MASATOMI et al. 1985)、この年の繁殖は1番だけであろう。1985年6月8日、大沼で成鳥2羽・幼鳥2羽が観察された。小沼では成鳥1-2羽が繁殖期間中見られているので、繁殖活動を途中で中止したか、あるいはまったく繁殖活動に入らなかったのかも知れない。前年、小沼では成鳥1羽しか観察されなかったため、この年小沼で見られた番は、これまで小沼で繁殖をしてきた番とは異なった配偶か、あるいはまったく別の番と考えられる。

生花苗沼：北海道教育庁(1981)は、1979、1980両年にこの場所での繁殖を報告しており、また、ここをタンチョウが毎年繁殖する良好な営巣地としているが、飯嶋・山田(1983)は北海道教育庁の考え方には否定的であった。ところが、今回の新資料の追加によって、連続繁殖の可能性が出てきた。

この場所では1975年から成鳥の記録があり、また、生花苗沼-キモントウ沼間の生花地区では1970年11月25日より成鳥の記録があり、1972年には10月14日-12月5日間、幼鳥を伴った家族も見られた。この年、十勝地方では繁殖の確認はなかった。生花地区では、幼鳥は1975年を除いて、1976年まで秋-冬期間に観察されている。生花苗沼では、1977年9月15日には成鳥2羽・幼鳥1羽が観察された。この記録は後述するように幼鳥も飛行可能な時期のものであり、この年の4-8月の記録や、前年(1976年)の記録が極めて少ないこと、生花苗沼がキモントウ沼と近接しており、キモントウ沼ではこの年3番の営巣が確認されていることなどを考慮すると、繁殖した可能性はあるものの、断定することはできない。1978年には4月29日に抱卵中の成鳥が観察されたが、幼鳥の観察記録はない。1979年には5月22-29日に営巣が確認され(北海道教育庁1981)、11月3日には成鳥2羽・幼鳥1羽が観察されたが、この家族の由来は不明である。1980年も営巣し、6月9-15日には幼鳥2羽が認められた(北海道教育庁1981)。しかし、このうち1羽の幼鳥は途中死亡したようである。1981年は営巣抱卵の確認はないが、9月26日に成鳥4羽・幼鳥2羽が観察された。これはどのような家族構成であったかは不明であるが、5月3日より成鳥1-2羽が見られており、この年、生花苗沼で繁殖したものである可能性は極めて高い。しかし、別項で述べるように、ここでは繁殖しないと思われる個体も観察されているので、繁殖したと断定するに至らない。1982、83両年も繁殖は確認されず、空中調査によっても巣はみつからなかった(正富ら1982,1983)。しかし、繁殖期間中成鳥は観察されている。1982年は3月30日-5月26日間、成鳥1-5羽の記録があり、10月17日には成鳥2羽・幼鳥1羽が見られたが、この家族の由来は不明である。1983年は4月3日-6月19日間、成鳥1-3羽の記録がある。主に、2羽の群である場合が多く、1羽ずつ別々に行動している場合や、3羽1群の場合もあった。この中には、明らかに繁殖していないと思われる個体もいた(Table 5)。従って、1982、83両年とも、繁殖の可能性は全く否定できない。1984年5月22日、就巢交代の儀式が見られ、営巣が確認された。ただし、幼鳥を認めるに至っていない。1985年5月26日、成鳥2羽・幼鳥2羽を飛行機から観察した。

以上のことから、北海道教育庁(1981)のように、タンチョウが毎年繁殖するとは断定できないが、タンチョウの毎年同一番が同一場所で繁殖するという生活様式(正富1970)からいえば、積極的阻害要因のない限り繁殖の連続する可能性は、生花苗沼周辺にはあるのかも知れない。

ホロカヤントウ沼：この沼の周辺の湿地は非常に狭く、1980年に1回の繁殖記録しかない。飯嶋・山田(1983)は、この場所での繁殖記録を1981年のみとしているが、これは資料の読み誤りである。1980年5月4日、増水のため水没した巣と2卵、および巣の近くにいた成鳥2羽が観察された。従って、この場所では1度も孵化に至っていない。

トウベリ湿原：我々の資料では、1961年10月から観察記録があるが、繁殖の初確認は1971年であった。この年、湿原内に放牧されるウシ・ウマの管理人によって、夏から幼鳥が観察されていたが、9月22日に幼鳥1羽を確認した。1972年は春先から成鳥が観察されているが、8月2日に成鳥の腐乱死体が発見されており、また幼鳥の確認もないので、この年、繁殖活動には入らなかったか、入ったとしても、途中放棄されたのであろう。1973年8月19日、幼鳥1羽を観察したが、これは成鳥2羽とともに飛翔中であつた。飯嶋・山田(1983)は、この年、北海道教育庁の調査でも巣を発見したと述べているが、これは1974年の営巣

抱卵確認の記録の読み誤りである。1974年8月21日、成鳥2羽・幼鳥1羽が観察された。1975年は4月9日-11月4日間、成鳥2羽が見られた。巣卵や幼鳥の確認はないが、繁殖活動に入った可能性はある。1976年8月4-30日、成鳥2羽・幼鳥2羽が認められた。この年、キモントウ沼大沼の番にも幼鳥2羽が認められている。1977年は放牧家畜の管理人によって夏から幼鳥が見られていたが、9月23日、幼鳥1羽を確認した。1978年も同様で、9月24日に幼鳥1羽を確認した。1979年は北海道教育庁（1981）が営巣報告をしている（5月22日の調査）が、この年、幼鳥の観察記録はない。1980年も北海道教育庁（1981）が調査を行っているが、4月14日の調査では巣は認められていない。6月4日になって、巣が確認されたが、この年も、幼鳥の確認はない。ただし、12月6日にこの湿原に隣接する牧場に成長3羽・幼鳥1羽が飛来した。この群の由来は不明である。飯嶋・山田（1983）によると、1981年も1番繁殖したことになるが、この年は巣卵、幼鳥とも確認されていないことが、今回の資料の再整理によって判明した。しかし、4月19日-5月16日間、成鳥1-2羽の観察記録があるので、繁殖の可能性はまったく否定できない。1982年は正富ら（1982,1983）は営巣は認められなかったと報告しているが、6月下旬-7月上旬に成鳥2羽・幼鳥1羽が観察された。1983年5月4日、抱卵中の成鳥が観察され、7月には幼鳥1羽が確認された。1984年5月22日、就巢交代の様子が観察され繁殖が確認されたが、幼鳥を認めるに至っていない。1985年6月8日、成鳥2羽・幼鳥1羽が観察された。

以上述べたように、この場所では1971年以来ほぼ毎年繁殖の記録があり、大樹町内では、キモントウ沼とともに、非常に良好な繁殖地といえることができる。

## 2) 豊頃町

湧洞沼：周囲17.5 km、面積3.73 km<sup>2</sup>の海跡湖で、流入する湧洞川河口一帯が湿原となっており、ヨシが繁茂している。沼にはウグイ、ワカサギ、カレイなど37種の魚類をはじめ、貝類や小型のエビも多数生息する（北海道1978）。

北海道教育庁（1975）、江山・井上（1976）によると、この場所では1948年にタンチョウが観察され、繁殖もしたとされている。1949年以後の繁殖の確実な記録は1971年におけるもので、5月に成鳥2羽・幼鳥1羽が観察された。前述のように、同一番が同一場所で繁殖するものとする、1971年までに繁殖はあったものと考えられるが、この間の記録がほとんどないため、繁殖状況についてはまったく不明である。1972年以後も観察記録はないが、1976年になって9月28日に成鳥2羽・幼鳥1羽、10月14日に成鳥2羽・幼鳥2羽がそれぞれ観察された。しかし、この年も春-夏の観察記録がないため、9月28日に見られた家族はこの場所で繁殖したものとも思われるが、断定することはできない。1977年も冬の記録しかなく、繁殖状況は不明である。1978年は9月15日に成鳥2羽・幼鳥1羽を認めた。この年は6月に成鳥2羽の記録があるのみであるので、繁殖した可能性は極めて高いものの、断定はできない。1979年5月19-22日、巣卵を確認した（北海道教育庁1981）。しかし、この巣卵は、後日、沼の増水により水没した。1980年6月9-15日、成鳥2羽・幼鳥2羽が観察された（北海道教育庁1981）。この2羽の幼鳥は9月15日にも認められた。1981年は4月23日より成鳥の記録があり、9月15日に成鳥2羽・幼鳥2羽の構成の家族が2組観察された。1982年には2番の営巣が確認された（正富ら1982）。9月9日に成鳥2羽・幼鳥2羽が見られているが、どちらの番かは不明である。湧洞沼で2番の繁殖が確認されたのは、1982年以外にはない。幼鳥の飛行可能時期は孵化後3.0-3.5カ月とされているので（正富ら

1972)、孵化時期を5月中-下旬とすると、8月下旬には幼鳥は飛行可能な状態になっており、9月中旬には最も遅く孵化した幼鳥も飛行可能となる。しかし、これらの時点で、大きな移動がまだないのであれば、1981年9月15日に観察されたそれぞれ幼鳥2羽を伴った2家族は、湧洞沼で繁殖した可能性もある。1981年9月15日には、キモントウ沼で成鳥2羽・幼鳥1羽が観察されているが、この家族が同日湧洞沼に飛来したとは、群構成も違うことから考えられず、また、この年、後述する豊頃町内の長節湖・大津湿原では繁殖記録はないので、これらの状況からも、1981年に2番が繁殖した可能性は高いものといえる。1981年は、少なくとも1番の繁殖は確実であり、さらに、もう1番の繁殖もあったものと思われる。1983年も営巣が認められたが(正富ら1983)、幼鳥の確認をしていない。1984年には巣は見つけられていないが(MASATOMI et al. 1985)、繁殖期間を通して成鳥1-3羽が見られており、繁殖の可能性はまったく否定できない。1985年5月26日-6月10日には成鳥2羽・幼鳥1羽が観察された。

長節湖：周囲5 km、面積1.14 km<sup>2</sup>の海跡湖で、流入する長節川、長節小沢川河口一帯は湿原となっている。長節湖および湿原周辺には道路が敷設されている。湖にはチカ・フナ・シジミなどが生息する。

ここでは、1984年に繁殖の記録があるのみである(MASATOMI et al.)。ただし、抱卵確認までで幼鳥の確認をしていない。1976年11月11日に成鳥2羽・幼鳥1羽が観察されたが、この家族の由来は不明である。これ以外に、長節湖では非成鳥が観察された記録はない。

大津湿原：十勝川河口南側に展開し、面積約6 km<sup>2</sup> (5万分の1の地区より算出)である。長節湖の北側に近接しており、標高約60 mの丘陵で区切られている。

1973年から繁殖記録があるが(北海道教育庁1975)、以後、毎年は繁殖を確認していない。1973年5月29日-6月4日に成鳥2羽・幼鳥1羽が観察された。1974年も営巣抱卵が確認されたが(北海道教育庁1975)、孵化には至らなかったようである。1975年は観察記録がなく、1976年は7月20日に成鳥2羽が見られた記録があるのみである。1977年5月、営巣が確認されたが、幼鳥を確認していない。1978年は4月29-30日に1羽が観察された記録があるのみである。1979、1980両年は繁殖が確認されており(北海道教育庁1981)、1979年は営巣抱卵までの確認で、幼鳥を認めるに至っていないが、1980年は6月9-19日に成鳥2羽・幼鳥1羽が見られた。1981年は観察記録がなく、1982、1983両年は繁殖が確認された。1982年5月23日、営巣が認められ(正富ら1982)、1983年は夏に、地元の住民によって成鳥2羽・幼鳥1羽が観察された。1984年は繁殖の確認はなく、12月13日に成鳥2羽・幼鳥1羽が見られたが、この家族の由来は不明である。この年は長節湖で繁殖が認められたが、これまで、同一年内に大津湿原と長節湖双方で、それぞれ繁殖が確認されたことはない。大津湿原・長節湖、それにこれまで繁殖の確認されていない浦幌町のトイトツキ湿原は、現在のところ、同一番の繁殖エリアといえよう。1985年5月26日、成鳥2羽・幼鳥1羽が観察された。

以上7カ所の繁殖地について述べたが、確実な繁殖地は、キモントウ沼、生花苗沼、トウベリ湿原、湧洞沼、大津湿原の計5カ所である。今後、十勝地方でタンチョウの生息数が増加すれば、ホロカヤントウ沼、長節湖からトイトツキ湿原にわたるエリアで、複数の番が繁殖するかも知れない。最近10年間は、5-6番(少なくとも4番)が、ほぼ毎年繁殖し

ていると思われる。最も繁殖番数の多かったのは1980年で、7番であった。十勝地方では、これまでの繁殖成績から、10番の繁殖活動が可能のように思われる。

### 3. 幼鳥の成育状況

繁殖の項で、繁殖したと記載してあるのは、営巣、(抱)卵、幼鳥のいずれかを確認した場合である。しかし、どの番において、何羽の幼鳥が孵化し、何羽が成長したかという追跡調査はほとんどない。Table 3に、各繁殖地およびその周辺で、9月までに確認した幼鳥の数を示した。ただし、興味ある記録については、その後の記録も記載した。

Table 3. Numbers of chicks of the Japanese Crane observed at or around the breeding area in the Tokachi District, Hokkaido, mainly between summer and September.

	Taiki				Toyokoro	
	Lake Kimonto		Lake	Toberi	Lake	Otsu
	O-numa	O-numa or Ko-numa?	Oikamanai (Seika & Bansei)	Marsh	Yudo	Marsh
1971				1 [summer Sep. 22	1 May	
1972			1 Oct. 14* 1 Nov. 3*			
1973	1 Dec. 2			1 Aug. 19		1 [May 29 Jun. 4
1974	1 Aug. 8	1 [Jul. 13 Aug. 8	1 Sep. 29* (dead body)	1 [Aug. 21 Sep. 19		
1976	2 Jul. 2	1 Jul. 2		2 [Aug. 4 Aug. 30	1 Sep. 28 2 Oct. 14	
1977			1 Sep. 15	1 [summer Sep. 23		
1978				1 [summer Sep. 24	1 Sep. 15	
1979		1 Jul. 11				
1980	[2 Jun. 9 1 Aug.	[2 Jun. 9 1 Aug.	[2 Jun. 9 1-2 Aug.		2 [Jun. 19 Sep. 15	1 [Jun. 9 Aug.
1981	1 Jul. 20	1 Jun. 27 1 Sep. 15	2 Sep. 26		4 Sep. 15	
1982		1 Oct. 17		1 [Jun. Jul.	2 Sep. 9	
1983	1 Jul. 31	1 Jun. 19		1 Jul.		1 summer
1984	1 Jul. 29	1 Aug. 25				
1985	2 [Jun. 8 Jul. 9		[2 May 26 1 Jul. 9	1 [Jun. 1 Jul. 9	1 [May 26 Jun. 10	1 [May 26 Jul. 9

\* : records at Seika

## 4. 非繁殖個体

繁殖期間中、繁殖しない個体は、大樹・豊頃両町および陸別町、上士幌町で観察されている。特に、豊頃町育素多沼周辺において記録が多く、亜成鳥の観察もあるが、大樹町では繁殖しない亜成鳥が観察されたのは、1976年7月2日（キモントウ沼）と1981年4月5日（生花）の2回しかない。なお、育素多沼では、これまで、繁殖の記録はない。大樹町では繁殖地域以外での、繁殖期間中の、これら非繁殖個体の観察例は少ない。Table 4に、大樹・豊頃両町における、非繁殖個体あるいはそうと思われる個体の記録を示した。これらの成鳥については、5月までのものをあげた。これは、6月以後の記録は、繁殖活動を中断して他地区へ飛来した際に観察されたのかも知れぬ記録との区別がつかないとの理由による。

Table 4. Sight records of the Japanese Crane considered to be non-breeder at the Taiki and Toyokoro regions in the Tokachi District, Hokkaido.

Kyu-toshibetsu River	Taiki				Toyokoro		
	Lake Kimonto	Lake Oikamanai	Seika or Bansei	Toberi Marsh	Lake Yudo	Lake Chobushi	Lake Ikusota
1976	SA 1 Jun. 2	A 1 Apr. 24	A 2 Apr. 17				
1977					A 3 May 1		
1978		A 1 Apr. 29			A 1, SA 3 Jun. 1		
1980			A 1 Apr. 14	A 1 Apr. 14			
1981		A 1, SA 1 Apr. 5 A 2 Apr. 29				A 1, SA 1 Apr. 21	SA 2 Apr. 19
1982	A 3 Apr. 12-29	A 3 Apr. 29			A 2 May 6	A 1, SA 1 May 5 2 May 30	
1983	A 1 Apr. -May		A 1 May 4			SA 1 Apr. 6 1 Apr. 21	A 1-2 [Apr. 22 May 1
1984	A 1 May-Jul.	A 2 [Apr. 29 May 6		A 1 May 3-27		A 2 Apr. 29 A 2 May 13	1 May 12
1985		A 1 Apr. 28-29	A 2 May 5-26	A 1 Apr. 29		A 2 $\leq$ [Apr. 17 May 20 SA 2 $\leq$ [May 1 Aug. 11	SA 1-2 Aug. 1-31

## 5. 生息数

十勝地方のように、タンチョウの生息数の少ない地区においてすら、その生息数を正確に把握するのは困難である。というのは、繁殖個体のほかに、孵化した幼鳥、成長途中で死亡した幼鳥、非繁殖鳥などがあり、また、後述するように、少数乍ら事故死する個体もあって流動的だからである。Table 5に、我々の記録から推定し得る各地の确实と思われる最大の生息数と、比較のために、毎年12月5日を中心に行われる一斉調査の記録を示した。4-9月の成鳥の数は、繁殖個体と非繁殖個体の合計か、もしくはその期間に重複しない成鳥の合計である。10-12月のそれぞれの数は、重複しない観察個体の合計である。ただし、10-12月の記録は、下記の理由によって、各町間で重複があるかも知れない。

飯嶋・山田(1983)は、大樹町における、タンチョウの冬期移動前後の個体数の増加について言及し、他地区からの飛来があるためと述べているが、これは、たまたま、非繁殖個体が、繁殖期間中、それとは識別されず(繁殖地近辺に非繁殖個体が生息していても、繁殖個体と区別できない場合が多い)、渡去(移動)前になって、はじめて、繁殖個体とは別に確認された場合も考えられるので、簡単に、他地区から飛来があったとは断定できない。しかし、1982年の大樹町における記録のように、秋期に成鳥が20羽以上観察された場合には(11月14日の記録)、他地区からの飛来があったと考えても無理はない。1982年11月14日には豊頃町では、湧洞沼、育素多沼でそれぞれ成鳥2羽が観察されているので、この時点で、十勝地方における、成鳥の生息数は24-26羽ということになる。しかし、豊頃町における、1982年秋-冬期の重複しない成鳥数は7羽である。我々の調査が充分なものであるとすると、秋-冬期には大樹、豊頃両町間を往復している個体があるということになる。いずれにせよ、個体識別を行っていないので、この点について結論を下すことはできない。

Table 5. Estimated numbers of the Japanese Crane in the Tokachi District, Hokkaido.

	Taiki				Toyokoro				Urahoro			Ikeda			
	a		b		c		a		b		c	a		b	c
	A	SA	J	U	A	SA	J	U	A	SA	J	A	J	A	J
1971	2		1		4	1			0	0	2	1			
1972	3	≤			6	1			2	1					
1973	6		1		6	1			4	1	2	1			
1974	6		3		4	1			0	0	2				
1975	6-8				6				2	0					
1976	9	1	5						7	4	3	4	1	2-4	2
1977	9-10		2		6	1			4	0	5			2	
1978	9		1		6	2			6	2	4-5	3	1	2	
1979	8		1		8	2			8	3	4			2	
1980	10		6		11-14	4-5			4	2	6	3			
1981	9-11	1	3		4	1			0	0	7	2	4	4	1
1982	9-11		1		20-22	3			6	2	9	1	2	2	7
1983	10		2		5-7	1-2			0	0	7	1	1	1	10
1984	9		1		5	1			2	1	7		1	12	1
1985	10		5		8	4			4	1	9	2	2	5	1

U: Unknown; a: Apr.-Sep. b: Oct.-Dec. c: National Crane Survey

現在のところ、十勝地方の生息数は20-25羽と推定される。

## 6. 死 亡 例

これまで、5例の死亡事故が報告されている。以下、地区別に記載するが、いずれも管轄地区教育委員会よりの資料である。

大樹町：1972年8月2日、トウベリ湿原で成鳥1羽の腐乱死体が発見された。原因不明。1974年9月29日、生花で幼鳥1羽が感電死した。

豊頃町：1972年10月24日、幌岡で1羽死亡。感電死と推定された。

浦幌町：1956年12月4日、豊北で成鳥(雌3才)1羽が感電死した。1971年11月、愛牛で幼鳥1羽死亡。感電死と推定された。

## 要 約

1. 1969-1985年の記録を基に、北海道十勝地方のタンチョウの生息状況について述べた。
2. 主な生息地は大樹町と豊頃町である。浦幌町にも生息するが、観察記録は少なく、非繁殖期におけるものがほとんどである。このほか、池田町で2例、広尾町、上士幌町、陸別町でそれぞれ1例の観察記録があった。
3. タンチョウは、毎年、3月下旬-4月上旬に十勝地方に渡来し、12月下旬にはほとんど渡来する。1-3月上旬にも少数の観察記録があった。
4. 繁殖地は大樹町でキモントウ沼、生花苗沼、ホロカヤントウ沼、トウベリ湿原の4カ所、豊頃町で湧洞沼、長節湖、大津湿原の3カ所の計7カ所である。ただし、ホロカヤントウ沼、長節湖では、これまで、それぞれ1回の観察記録しかなく、ホロカヤントウ沼の例は巢卵の水没による途中放棄で孵化に至らず、長節湖の例では幼鳥の確認に至らなかった。
5. 繁殖の初確認は、我々の記録では、キモントウ沼：1973年、生花苗沼：1978年、ホロカヤントウ沼：1980年、トウベリ湿原：1971年、湧洞沼：1971年、長節湖：1984年、大津湿原：1973年であった。ただし、湧洞沼では1948年に繁殖したという報告がある。
6. キモントウ沼では、ほぼ毎年、2番が繁殖していると思われる。1977年には3番が繁殖した。他の場所では、1年に1番の繁殖しか認められていないが、湧洞沼では、1982年に2番の繁殖が確認された。
7. これまでの最大繁殖番数は7番(1980年)であった。
8. 繁殖期間中に、繁殖しない成鳥、亜成鳥が、大樹・豊頃、陸別、上士幌の4町で観察された。大樹町においては1976年から、豊頃町においては1977年から記録があり、大樹町では1981年から、豊頃町では1980年から、毎年、2羽以上の非繁殖個体が観察されている。陸別町では、1981年4月に1羽が、上士幌町では、1983年6月に亜成鳥3羽が飛来した。
9. 現在のところ、十勝地方のタンチョウの生息数は20-25羽と推定される。

## 文 献

- 江山正美・井上雅子。1976。タンチョウ-生息状況と保護対策の方向。東京、観光資源保護財団。
- 北海道。1978。野鳥生息環境実態調査報告書-湧洞沼-。
- 。1986。タンチョウ特別調査報告書。
- 北海道教育庁。1975。特別天然記念物タンチョウ特別調査報告書。北海道教育委員会。
- 。1981。特別天然記念物タンチョウ特別調査報告書。北海道教育委員会。
- 飯嶋良朗・山田政一。1983。北海道十勝南部におけるタンチョウの生息状況。鳥32：129-183。

- 川辺百樹. 1985. 上士幌町に飛来したタンチョウについて. 上士幌町ひがし大雪博物館研究報告 7 : 49-50.
- 正富宏之. 1970. タンチョウの生活における諸問題 I. 専修大学美唄農工短大年報(1) : 37-45.
- . 1972. タンチョウの生活における諸問題IV. 専修大学美唄農工短大年報(4) : 139-152.
- 正富宏之・安部誠典・百瀬邦和・松尾武芳・長山晴美. 1982. 1982年繁殖期におけるタンチョウの分布-北海道東部における空中調査-. 専修大学北海道短期大学紀要(15) : 163-173.
- 正富宏之, 安部誠典, 百瀬邦和, 杉本剛, 長山晴美. 1983. 1983年繁殖期におけるタンチョウの分布-北海道東部における空中調査-. 専修大学北海道短期大学紀要(16) : 200-212.
- MASATOMI, H., MOMOSE, K. and HANAWA, S.. 1985. Aerial surveys on the Tancho (*Grus japonensis*) breeding in eastern Hokkaido in 1984. International Spring Censuses on *Grus japonensis* (Red-crowned Crane) in 1984 : 37-66. Tokyo, Special Committee on Crane Conservation.

## Status of the Japanese Crane, *Grus japonensis* in the Tokachi District, Hokkaido

### Tokachi Chapter, Wild Bird Society of Japan

The breeding and distribution of the Japanese Crane, *Grus japonensis*, in the Tokachi District, eastern Hokkaido, are described based on observations made chiefly from 1969 to 1985.

Japanese Cranes were recorded mainly from the Taiki and Toyokoro regions and a few records were also obtained from Urahoro, Ikeda, Hiroo, Kamishihoro, and Rikubetsu regions during the period from 1977 to 1983.

Japanese Cranes occurred from late March or early April to late December every year in the Tokachi District. However, they were rarely seen from mid-December to early March.

There were seven breeding sites in this district: Lakes Kimonto, Horokayanto and Oikamanai, and Toberi Marsh in Taiki, Lakes Yudo and Chobusi, and Otsu Marsh in Toyokoro. The first breeding record for each site, as far as we know, was in 1971 in the Toberi Marsh and at Lake Yudo, in 1973 near Lake Kimonto and in the Otsu Marsh, in 1978 near Lake Oikamanai, in 1980 near Lake Horokayanto, and in 1984 near Lake Chobusi. Only one case of breeding was recorded from Lakes Horokayanto and Chobushi. Thus there are five suitable breeding habitats with 5 to 6 breeding pairs in the Tokachi District. The largest number of breeding pairs was 7 in 1980.

In addition, some Japanese cranes considered to be non-breeders were observed in the Taiki, Toyokoro, Rikubetsu, and Kamishihoro regions.

Thus, the total number of birds occurring in the Tokachi District is considered to be 20 to 25.

Laboratory of Wildlife Resource Ecology, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine, Obihiro, 080.